

「異文化体験」を視覚化する：

海外研修プログラムにおけるコラージュワークショップのデザイン

大橋 香奈 松永 智子 小山 健太 光岡 寿郎

1. はじめに

人・商品・情報などが国境を越えて移動するグローバル化の進展に伴い、大学教育において海外留学の機会を提供することの重要性が認識されるようになった。ここでいう「留学」は、「海外の大学等における教育又は研究等の活動及び、学位取得を目的としなくても単位取得が可能な学習活動や、異文化体験・語学の実地習得、研究指導を受ける活動等、海外の教育機関（あるいはそれに付属する機関）と関連して行なわれる各種プログラムへの参加」を意味する（独立行政法人日本学生支援機構 2021）。近年では、学生が履修計画や経済状況、語学力、希望する進路などに合わせて選択できるように、1ヶ月未満の短期のものから、1学期または複数学期といった中長期のものまで、多くの大学が多様な留学プログラムを提供している。

日本人学生留学状況調査の結果によると、2009年の留学経験者数は23,988人だったが、10年後の2019年には107,346人に増加した（独立行政法人日本学生支援機構 2011；独立行政法人日本学生支援機構 2021）¹⁾。2019年の留学経験者のうち66.4%（71,263人）は、1ヶ月未満の短期研修に参加した。学生にとって短期研修は、期間や費用などの面でハードルが低く参加しやすい。一方で、短期研修の場合、学生の変化（留学効果）について十分な検証が行われていないことが指摘されている。箕曲ら（2017）は、短期研修の参加学生自身による「体験の言語化」を試みているが、「自分に自信がついた」という「紋切り型の語り」が続出し、語りの多様性が見られないことを課題として挙げている。佐々木ら（2020）は、短期研修に関わる教員は帰国した学生の変化を感じるが、その変化を客観的に示すことは容易ではないと述べている。

本研究では、海外短期研修の参加者に対して、自身の異文化体験やそれによる帰国後の変化を多面的に捉えて視覚化することを促すワークショップのデザインを検討した。その際、コラージュという技法に着目した。コラージュは、写真、新聞、雑誌、チラシなどからイメージを切り取り、1枚の紙の上に貼り付けていくことで、何かを表現するアートの技法である。ハサミでイメージを切り取り、紙に貼るという基本的な作業さえできれば、アートに馴染みがない人でも取り組める。研究、教育、セラピーなどさまざまな分野で、コラージュを

「異文化体験」を視覚化する

用いたワークショップが行なわれている。私たちは先行研究を踏まえ、海外短期研修の参加者が受講する授業の一環で、参加者が異文化体験による変化を振り返って視覚化し、他の参加者と共有して学び合うことを目的としたコラージュワークショップをデザインして実施した。

本稿では、まず先行研究をレビューし、コラージュワークショップをどのようにデザインしたかを述べる。そのうえで、ワークショップを実施したことで、海外短期研修の参加者の異文化体験によるどのような変化が視覚化され共有されたか、そのプロセスとコラージュ作品の分析結果を明らかにし、ワークショップについての考察を述べる。

2. 先行研究

2.1 コラージュを取り入れた研究

コラージュという技法が一般的に認知されるようになったのは、20世紀初頭にパブロ・ピカソ (Pablo Picasso) やジョルジュ・ブラック (Georges Braque) といった芸術家たちが、伝統的なエリート主義の芸術の慣習や表現の境界線に挑戦する目的で用いたことがきっかけである (Butler-Kisber 2018)。コラージュは、身近にある新聞や雑誌やチラシなどを材料として使う。絵画の巧みな技法を習得する必要はなく、子どもの頃に身につけた切り貼りなどの基本的な技法を用いることから、民主的でアクセスしやすいアートとして、調査研究、教育実践、セラピーなどさまざまな分野で取り入れられている (Prasad 2020)。この動向は、アートの創造性を研究に融合させて知識を構築する「アートベース・リサーチ (ABR: Arts-Based Research)」(Leavy 2015) と呼ばれる学際的アプローチの展開の一つと位置づけることができる。ABRのツールとして、コラージュは以下の点で貢献できると考えられている (Butler-Kisber 2018: 116-117 を和訳)。

- ・第一に、コラージュには感覚的・身体的な反応を引き起こす力があり、見る者に非常に具体的な応答を促す。コラージュは、単一的あるいは直線的に考えるのではなく、「並置と差異の関係」(Rainey 1998: 124) を意識して考えるように導く。それぞれの断片が組み合わせさったり対立したりすることで、新たなつながりやアイデアを生み出す。
- ・第二に、コラージュの中のメタファー (類似性や比較) とメトニミー (連続性やつながり) の使い方、隙間や余白は、意図したものと意図していないものの両方を明らかにする。このプロセスそのものが、「提示されるものに対する意識的なコントロールを弱め、より高度な表現に貢献し、考察とその後の明確化の領域を広げる」(Williams 2000: 275)。
- ・第三に、直線的に書かれた文章においては、作者はアイデアから感情へ、あるいは「頭

から心へ」と働きかける。コラージュではその逆である。作者は断片を探し、それらを接着して、特定のアイデアではなく、経験や現象に対する感情や感覚を表現する。そうすることで、彼や彼女は「心から頭へ」と働きかける (Butler-Kisber 2010)。それによって、「再発見し、再配置し、新たに結びつけること」(Mullen 1999: 292) ができる。暗黙の了解、あるいは意識されないでいたことが、表面に湧き上がってくる。

- ・最後に、文章では通常、最終的なかたちに磨きをかけ、可能な限り正確にメッセージを表現するために、何度も下書きが繰り返される。コラージュの場合、イメージを貼り付けるまでさまざまな「試行錯誤」や変更があるかもしれないが、一度貼り付けられたイメージは簡単には変更できない。この寓意的、関係的な特質は、意識的、無意識的な考えを解釈するさまざまな方法を提供する。コラージュには、異なる解釈を可能にする曖昧さがあり、時間の経過とともにその解釈は変化しうる (Butler-Kisber, Allnutt, Furlini, Kronish, Markus, & Stewart 2005)。

これらのコラージュの特徴を活かした研究が行なわれている。Norris ら (2007) は、南アフリカにおいて感染拡大している HIV/エイズに対する、若者の態度や知識を明らかにする目的で、小中学校でコラージュワークショップを実施した。この研究では、若者は創造的活動に対する関心が高いことや、学習者である彼や彼女自身の思考や感情に焦点を当てることを目的としているという理由から、コラージュを採用している。参加者は「HIV/エイズについて知っていること」を、雑誌の切り抜きを貼り付けたコラージュで表現することを求められた。ワークショップ開始直後、参加者の多くは「正しい答え」を模索していた。しかし、進行役の説明を受けて、参加者は徐々に自身の思いや考えを表現するという趣旨を理解して取り組み始めた。最終的な作品では、参加者が HIV/エイズについてどのように感じたり考えたりしているのかが明らかになった。考察として、コラージュという表現は、批判的ではない雰囲気の中で話し、質問し、誤解を明らかにできるような対話の場を生み出したと述べられている。

Yuen (2016) は、カナダの先住民族の女性を対象としたコラージュワークショップを実施した。この研究では、先住民族の女性が非先住民族の女性よりも暴力的犯罪の被害に遭いやすいことを踏まえ、彼女たちにとっての「癒し」になる経験はどのようなものかを理解するためにコラージュを用いている。先住民族の女性にとっての癒しとは何か、癒しのプロセスにおいて文化的に意味のある支援の影響はどのようなものか、癒しのプロセスにおける余暇の影響はどのようなものかという問いかけに対し、参加者はコラージュによる表現で答えた。Yuen はワークショップを振り返り、コラージュを用いることで、先住民族の女性たちの生きられた経験に関する痛烈で喚起的なメッセージを伝えられる可能性があり、それによって社会正義のための強力なプラットフォーム作りに貢献できるかもしれないと、展望を述

「異文化体験」を視覚化する

べている。

Chant (2020) は個人にとってのキャリアの意味を探索する研究において、コラージュを用いた調査を実施した。ライフストーリーとキャリアの関係を振り返る目的で、対象者がコラージュを制作し、その後その内容を使ったインタビューが実施された。調査結果の考察として、コラージュは「生きてきた人生のさまざまな文脈的側面を互いに関連づけながら、また人生の出来事やアイデンティティの構築を関連づけながら見ることができる方法であった」と述べられている。一方で、すべての人が自身の人生や家族やコミュニティについて、個人的な方法で振り返ることを心地よく感じるわけではないという懸念や、表現することをストレスに感じるという理由から、より客観的なアプローチを好む人がいる可能性も示されている。

これらの研究例から、コラージュはワークショップ（あるいは調査）の過程で、参加者が「質問に対する回答を具体化するツール」、「経験を振り返るツール」として、また研究者と参加者とのインタビューや関係者同士の「コミュニケーションを喚起するツール」として活用できることがわかる (Butler-Kisber 2018)。ただし、Norris ら (2007) の研究が示唆しているように、参加者にはコラージュで「正しい答え」を表現するのではなく自身の思いや考えを表現するよう促すことや、Chant (2020) が指摘しているように、参加者が個人的なことを表現することに抵抗を感じていないか気を配ることが重要と考えられる。

以上の先行研究での議論を踏まえ、本研究では、海外短期研修の参加者が、異文化体験によって自身の「世界の見方」がどのように変わったかという「質問に対する回答を具体化するツール」、研修での「経験を振り返るツール」、そしてその内容についての教員と参加者および参加者同士の「コミュニケーションを喚起するツール」としてコラージュを用いることにした。

2.2 教育的な文脈でのコラージュワークショップの可能性

教育的な文脈で言えば、コラージュの技法は、シーモア・パパート (Seymour Papert) が提唱したことで知られる「コンストラクショニズム (Constructionism)」と呼ばれる学習理論と相性が良い。この理論の中心にあるのは、「Learning-by-making (つくることによって学ぶ)」という考え方であり、ものづくり活動を通して「学習者が積極的に世界での経験から知識を構築したり、再構築したりする学び」を行なうという主張である (平野・紅林 2014)。この理論を下敷きにすると、以下のように考えられる。海外短期研修の参加者を対象にしたコラージュワークショップにおいて、参加者はコラージュをつくるというものづくり活動を通して、研修中の異文化体験から学んだことや自身の変化を振り返り、それを知識として目にみえるかたちで表現する。また、その活動の過程や完成した作品を、教員や他の参加者に見せてコミュニケーションするなかで、知識を再構築することが期待できる。

この学習過程を、ダイアナ・ローリラード (Diana Laurillard) が提案する「協働による学習 (Learning Through Collaboration)」の対話型フレームワーク (次頁の図 1) を援用して、より具体的に考えてみたい。ローリラードは、教育をデザイン科学としてとらえることを提唱したことで知られている (Laurillard 2012)。彼女は、21 世紀の教員は、あらゆる教育分野において刻々と変化する文化的・技術的環境に対応しなければならない、建築家、エンジニア、プログラマーといった他のデザイン専門家と同じように、教員も創造的でエビデンスに基づいた方法で自分たちの仕事を改善しなければならないと主張している。またその実現のために、「対話型フレームワーク (Conversational Framework)」や「ペダゴジカル・パターン (Pedagogical Pattern)」というアプローチを提案している (Laurillard 2012)。それぞれについてのローリラードによる説明を、以下に要約する。「対話型フレームワーク」は、教員による効果的な教授法を構造化して図式化したものである。この図には、さまざまな学習方法において教員と学習者が担う役割や、教えることと学ぶことそれぞれに求められる要素に関する研究の議論が集約されている。「ペダゴジカル・パターン」は、その教育活動のパターンでは何をするのか、それはどのように、なぜ機能するのかを記述したものである。記述される項目は、タイトル、情報源 (その教育活動のアイデアの出典)、要約 (何がどのように教えられるかの簡単な説明)、トピック (他の教員が自分との関連性を判断するのに役立つキーワード)、学習成果 (学習者が最終的に何を知るか、何ができるようになるか)、根拠 (学習アプローチまたは教育デザインの原則)、期間 (総学習時間)、学習者の特性 (教育的前提条件、経験、興味)、設定 (対面式、混合式、オンライン)、教材・教具、学習サイクル (活動の順序)、グループサイズ (最小から最大までの範囲)、担当者の考察などである。

本研究では、コラージュワークショップのデザイン検討において、ローリラードによる「協働による学習」の対話型フレームワーク (図 1) を援用した。このフレームワークにおいては、共有される知識の構築を目指して、何らかのものづくり活動が行なわれることを想定している。進め方は、学生が少人数のグループに分かれて、教員の指導のもとで何かをつくり、最後にそれを見せて全員で知識を共有するという流れである。

図内の略語の意味は以下の通りである。TC は教員の考え (Teacher's Concept)、LC は学習者の考え (Learner's Concept)、PC は仲間 (他の学習者) の考え (Peer's Concept)、LP は学習者の実践 (Learner's Practice)、PP は仲間 (他の学習者) の実践 (Peer's Practice)、TPME は教員がつくる実践/モデリング環境 (Teacher's Practice/Modeling Environment)、そして二重線の矢印は継続的な反復サイクルを示している。実践環境とは、学習者がものづくり活動などを実践するとともに教員からのフィードバックを得られる環境、モデリング環境とは、学習者のアクションに対して意味のある情報が (教員がいなくても) フィードバックされる環境のことである。図の中心部 (二つの LC と LP を囲んでいる枠

「異文化体験」を視覚化する

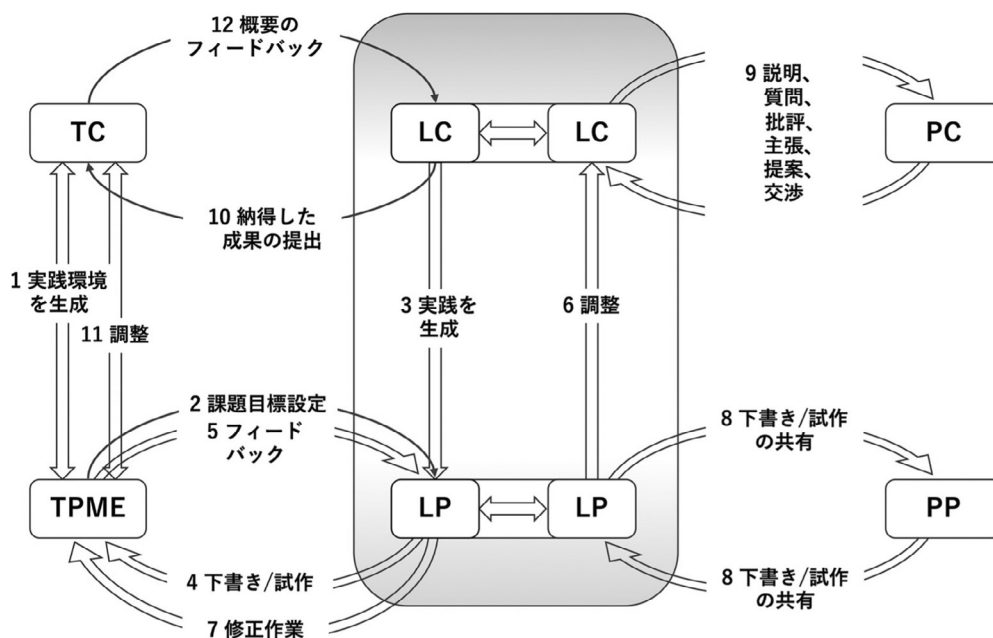


図1 協働による学習（Learning Through Collaboration）の対話型フレームワーク
 (Laurillard 2012: 208 の図 11.2 を和訳して作成)

内) は学習者の内部で起きること、左側は学習者と教員との関わりの中で起きるコミュニケーションサイクル、右側は学習者と仲間（他の学習者）との関わりで起きるコミュニケーションサイクルを表している。

図1で表現されていることを、本研究のコラージュワークショップで実現するとしたら、以下のような流れになる。図1の解説（Laurillard 2012: 207）を和訳して、コラージュワークショップ版に改変した。文頭の括弧の数字は、図内の数字を示している。

- 1) 教員は、学習者が海外短期研修での異文化体験とその後の自身の変化を振り返ってコラージュで表現し、それに対するフィードバックを得られるような実践環境をつくる。
- 2) 実践環境において、学習者は目標を設定される。
- 3) 学習者は、自分の考えをもとに、実践=コラージュづくりを開始する。
- 4) 学習者は、下絵をつくる。
- 5) 実践環境において、学習者は目標達成に向けたフィードバックを得る。
- 6) 学習者は、フィードバックをもとに、自分の考えを調整する。
- 7) 学習者は、考えの調整をもとに、修正作業をする。
- 8) 学習者は、仲間（他の学習者）に下絵を共有する。

- 9) 学習者は、仲間と互いに下絵を見せることで、説明、質問、批評、主張、提案、交渉などのやりとりをして、自分の考えを調整し、それをもとに行動も調整する。4)-9)までのサイクルは、納得できる作品が完成するまで繰り返される。
- 10) 学習者は、納得する作品が完成したら教員に提出する。
- 11) 教員は、学習者が提出した作品と、実践環境での学習者の取り組みを振り返り、必要に応じて実践環境を調整する。
- 12) 教員は、学習者の作品に対する講評のコメントを提示する。

本研究では、海外短期研修の参加者同士の「協働による学習」の連続的なサイクルを生み出すために、以上の流れをコラージュワークショップのデザインに組み込むことにした。次項において、より具体的なワークショップのデザインを「ペダゴジカル・パターン」の考え方で記述し、その後、結果と考察を述べる。

3. コラージュワークショップのデザイン

3.1 コラージュワークショップを導入した授業「異文化理解 A」の概要と履修者

・「異文化理解 A」授業概要²⁾

東京経済大学コミュニケーション学部国際コミュニケーション学科では、派遣先、派遣期間が異なるさまざまな海外研修のプログラムを実施している。ワークショップ形式を中心とした授業「異文化理解 A」では、海外研修を終えた学生が、帰国してから一定の期間を経たからこそ客観視できる自身にとっての異文化体験の意味を、多角的な観点から理解できるようになることを目標としている。この過程で履修者は、仲間とのディスカッションや、教員との対話を通じて、異文化体験から得られた成果を、残りの在学期間における学びや、その先に広がる将来の選択へ結びつける。同時に、その経験を他者に分かりやすく伝えるための場としてもこの授業を活用する。本授業は、4時限ずつ2日間で集中的に実施される形態をとる。選択必修科目で、1単位が認定される。

2023年度の担当教員は、本稿の著者4名である。授業は、表1の通り3部構成とした³⁾。本稿で扱うのは、第2部コラージュワークショップ(3時限分 合計270分)である。第2部で目標とする学習成果は以下の3点であり、その達成度合いが評価の基準になる。

- ・自身の異文化体験の意味を、多角的な観点から理解できるようになる。
- ・異文化体験から得られた成果を残りの在学期間における学びや、その先に広がる将来の選択へ結びつける手がかりを得る。
- ・異文化体験の意味を、コラージュ作品を通して他者に分かりやすく伝えられるようになる。

「異文化体験」を視覚化する

表1 2023年度1期「異文化理解A」授業日程

日程	時限(90分)	内容
8月1日	1時限目	第1部 フィリピンでの異文化体験を振り返る 映画鑑賞とディスカッション
	2時限目	
	3時限目	第2部 コラージュワークショップ: 異文化体験で「世界の見方」はどう変わった?
	4時限目	
8月2日	1時限目	第3部 これからの大学生活で「異文化」とどのように向き合 い、自分の「異文化対応能力」を高めるか? 回遊型面談+個人ワーク+プレゼンテーション
	2時限目	
	3時限目	
	4時限目	

・履修者（コラージュワークショップの参加者）

本稿では、2023年8月1日、2日に開講された「異文化理解A」の授業を履修し、コラージュワークショップに参加した国際コミュニケーション学科2年次の学生19名の事例を取り上げる。この19名の学生は、全員が2023年2月に実施されたフィリピンのエンデラン大学での約3週間の海外短期研修の参加者である。参加者は、滞在中に「マンツーマンレッスン」と「グループレッスン」による英語学習、現地学生との交流イベントのほか、学生寮での生活、現地でのアクティビティを体験した⁴⁾。この授業の時点では、帰国後約半年が経過していた。履修者は、一定の期間を経たからこそ客観視できる自身にとっての異文化体験の意味を、多角的な観点から理解することを目指して、授業に取り組んだ。

3.2 コラージュワークショップのペダゴジカル・パターン

上述の「ペダゴジカル・パターン」の項目をもとに、表2にコラージュワークショップのデザインを記述した。担当者の考察に関しては、次項の「結果と考察」において詳述する。

3.3 データの収集と分析

コラージュワークショップの最初のイントロダクションにおいて、本ワークショップを学術的な研究の対象として扱いたい旨を参加者に説明し、以下の2点について、ワークシート内に設けた同意書欄を使用して、個別に許可を得た。

- ・作品やワークシートの内容、発表内容の録音データを、参加者名を仮名にしたうえで、研究とその成果の発表の目的で使用すること
- ・ワークショップの作業や発表の様子を撮影して、学術的な研究とその成果の発表の目的

表2 コラージュワークショップのペダゴジカル・パターン

タイトル	コラージュワークショップ: 異文化体験で「世界の見方」はどう変わった?		
情報源	Laurillard(2012)が提案する「協働による学習」の対話型フレームワークと、Butler-Kisber(2018)が提案するコラージュワークショップをもとに考案。		
要約	海外研修を終えた学生が、帰国してから一定の期間を経たからこそ客観視できる自身にとつての異文化体験の意味を、多角的な観点から理解できるようになることを目標としている。学生は、海外研修での異文化体験を振り返り、異文化体験で自分の「世界の見方」がどのように変わったかを、コラージュ作品の制作を通して表現する。この過程で履修者は、仲間とのディスカッションや、教員との対話を通じて、異文化体験から得られた成果を残りの在学期間における学びや、その先に広がる将来の選択へと結びつける手がかりを得る。同時に、その経験を他者に分かりやすく伝えるための場としてもこの授業を活用する。		
トピック	海外短期研修での異文化体験による変化の視覚化		
学習成果	自身の異文化体験の意味を、多角的な観点から理解できるようになる。 異文化体験から得られた成果を残りの在学期間における学びや、その先に広がる将来の選択へ結びつける手がかりを得る。 異文化体験の意味を、コラージュ作品を通して他者に分かりやすく伝えられるようになる。		
根拠	「コンストラクショニズム(Constructionism)」学習理論 「協働による学習(Learning Through Collaboration)」の対話型フレームワーク		
期間	2023年8月1日、2日に開講された「異文化理解A」の授業内の3時限分 合計270分		
学習者の特性	2023年2月に実施されたフィリピンのエンデラン大学での約3週間の海外短期研修の参加学生19名。授業の時点で、帰国後約半年間が経過。		
設定	教室での対面形式		
教材・教具	<ul style="list-style-type: none"> ・コラージュの台紙となるA3の画用紙 ・コラージュの素材となる新聞・雑誌(本学図書館の廃棄予定のものを調達) ・コラージュの素材となる研修中の写真(学生が各自持参) ・完成したコラージュ作品について記述するワークシート ・ハサミ、のり、マスキングテープ、ペン、付箋 		
教育・学習プロセス (協働による学習の対話型 フレームワークの番号と連動)	内容	グループ サイズ	所要 時間
1) 教員による 実践環境の生成 2) 課題目標設定	イントロダクション: 教員からワークショップの説明、データの収集と使用についての説明、作業グループとして全体を4つのグループに分ける。各グループの作業用テーブルにコラージュの素材となる新聞・雑誌や、文房具を配置。	全体	15分
3) 学習者による 実践の生成 4) 下絵・試作作業 5) 実践環境からのフィードバック 6) 考えの調整 7) 修正作業	グループに分かれて、コラージュづくりを開始する。 グループという実践環境だが、作業は個人で行なう。 グループ内で互いの作業を見てコミュニケーションしながら、個人作業を進めることで、学生は自身の考えを調整し、修正作業を重ねる。	4-5人	75分
	休憩(10分)		
8) 学習者同士の共有	他グループのテーブルを回遊し、互いのコラージュ作品制作の途中経過を見る。	全体	10分
9) 学習者同士の説明、質問、 批評、主張、提案、交渉	互いの下絵を見て、やりとりをした後、自分の考えを調整し、それをもとに行動も調整する。	4-5人	40分
	片付け	全体	10分
10) 完成作品提出	学生は、コラージュで表現したことを説明する文章をワークシートに書き、コラージュ作品とともに提出する。	1人	20分
11) 教員は学習者の取り組みを 振り返る	教員から、ワークショップ1日目の振り返りと、2日目についての説明をする。	全体	10分
	1日目終了		
8) 学習者同士の共有	コラージュ作品を、教室に展示して発表会の準備をする。	全体	15分
9) 学習者同士の説明、質問、 批評、主張、提案、交渉	互いのコラージュ作品を鑑賞する。他の人の作品を見て感じたことを2つか3つのキーワードにして、付箋にメモして作品の下に貼る。	全体	25分
9) 学習者同士の説明、質問、 批評、主張、提案、交渉	一人ひとり、作品について発表し、付箋の内容に応答する。	全体	40分
12) 教員によるフィードバック	教員による講評を行なう。	全体	10分

「異文化体験」を視覚化する

で使用する

その際、データの収集および使用について許可しなかった場合でも、成績評価には一切影響がなく参加者は不利益を被らないこと、また不明な点や不安な点についてはいつでも相談が可能であることを合わせて説明した。以上の手続きによって、参加者全員の許可を得て、データを収集した。

参加者から収集したデータと教員によるメモやディスカッションの記録は、スキャンや文字起こし、清書を行ない、すべてデジタル化した。これらのデータを「事例-コード・マトリックス (佐藤 2008)」の方法で整理・分析した (図 2)。

「事例-コード・マトリックス」による整理・分析の手順は以下の通りである。まず、データを読み込み、コラージュ作品によって「海外短期研修中のどのような出来事が表現されたのか」、「帰国後のどのような変化が表現されたのか」という二つの問いに回答する部分に、その内容を要約した小見出しをつけるコーディング作業を行なった。その後、表計算ソフトを用いて、図 2 のように行に各参加者を事例として配置し、列にはコーディングによって生み出されたコードを配置した。各参加者の名前は、ランダムにアルファベット一文字に置き換えた。そして、各セルに該当する参加者の作品に関する記述を貼り付けた。

質的データ分析においてこのようなデータ・マトリックスを作成することは、一方では各事例の個性や具体性に対して十分に配慮しつつ、かつ他方では、事例の特殊性を越えた考察を行なううえで有効な作業になりうると考えられている (佐藤 2008)。

列：コード 行：履修者	人びとの態度	Don't be shyという考え方	日本とのつながり	交通事情	行事	貧困問題
A	人との関わりから温かさを感じた。	フィリピンで言われて特に印象に残っていたこと。				
B	日本よりも人が温かかった。		フィリピンの人とマリオとルイージの話で盛り上がった。離れていてもつながっている部分があると感じた。			
C	現地の人が手を振ってくれたり、お店の人が歓迎してくれたり、マンツーマンの先生と仲良くなった。日本で生活しているだけでは体験できなかった人の温かさに触れた。				バレンタインデーの日、先生からたくさんお菓子もらった。街の装飾も印象的だった。	滞在していたのは裕福な地域だったけど、スモークーマウンテンのような地域もあった。
D	フィリピンでは日本では感じたことのない人の温かさを感じた。初めて会った人でもフレンドリーで何気ない会話をしたり、写真を一緒に撮ったりしたので、人の愛の					

図 2 事例-コード・マトリックスによる整理・分析のイメージ

次項では、まず実際のワークショップのプロセスを詳述した後、「事例-コード・マトリックス」によるコラージュ作品の分析結果を明らかにし、考察を述べる。

4. 結果と考察

4.1 コラージュワークショップの実際

2023年8月1日、2日に、表2に示した「ペダゴジカル・パターン」内の順序、時間配分に沿って、コラージュワークショップ(3時限分 合計270分)を実施した。ここでは「ペダゴジカル・パターン」に示した教育・学習プロセスに沿って、当日の様子を詳述する。

・教員による実践環境の生成、課題目標設定

教員からワークショップの目的、目標と手順、研究のためのデータの収集と使用についての説明をしたうえで、作業グループとして全体を4つのグループに分けた。グループは、フィリピンでの研修時の「グループレッスン」のグループと同じメンバー構成とした。現地と一緒に学んだメンバーと作業をすることで、参加者が当時の記憶を呼び起こし、現地での異文化体験を振り返りやすくなると考えたためである。教室内の机を組み合わせて作業場をつくり、各グループにコラージュの素材となる新聞・雑誌や文房具を配置した。

新聞・雑誌は、本学図書館で廃棄予定のものと担当教員の自宅から持ち込んだものである。異文化体験の表現に活用しやすいイメージが多用されていると考えたことから、外国語の新聞や雑誌を中心に用意した。全体でダンボール(A3用紙が余裕をもって入る外形3辺合計120cm以内の定番サイズ)3箱分程度であった。

また、参加者に、自分のコラージュ作品で使いたい写真と、ハサミやのり、テープを持参するように事前に案内していたため、参加者自身が用意したのも実践環境を構成する要素となった。

・学習者による実践の生成、下絵・試作作業、実践環境からのフィードバック、考えの調整、修正作業

グループに分かれて、コラージュづくりを開始した。グループという実践環境だが、作業は個人で行なった。担当教員4名は、各グループを巡回した。作業開始直後は、「先生これであってますか?」「こんな感じでいいんですか?」と、数名の参加者から「正しい答え」を求めての質問が寄せられたが、「正しい答え」はなく、自分の体験や思いや考えを表現するよう促した。また、最初は作業の進め方に戸惑っていた参加者も、グループ内で互いの作業を見てコミュニケーションしながら個人作業を進めることで、自身の考えを調整し、試作・修正作業に取り組んだ。

「異文化体験」を視覚化する



写真1 グループでの実践環境（撮影：大橋香奈）



写真2 グループ内での個人作業の様子（撮影：大橋香奈）

・学習者同士の共有，説明，質問，批評，主張，提案，交渉

10分間の休憩の後，参加者は自分のグループから離れて，他グループを回遊し，互いのコラージュ作品制作の途中経過を見た。その際，参加者は，互いの制作途中の「下絵」に対して，質問したり，批評したり，主張したり，提案したりというやりとりをして，自分の考えを調整し，その後，自分の机に戻って，作業を再開した。

・参加者は完成作品提出，教員は学習者の取り組みを振り返る

初日の最後，参加者は作品を完成させて，コラージュで表現したことを簡単に説明する文章をワークシートに書いて，コラージュ作品とともに提出した。教員から，ワークショップ1日目の振り返りを述べ，2日目についての説明をして，1日目は終了した。

・学習者同士の共有，説明，質問，批評，主張，提案，交渉

2日目の最初に，完成した全員のコラージュ作品を教室に展示して，発表会の準備をした。準備完了後，全員でコラージュ作品を鑑賞し，他の人の作品を見て感じたことをキーワードにして，付箋にメモして作品の下に貼った。発表時は一人ひとり，作品について解説し，他の参加者が貼った付箋の内容に対するフィードバックもした。

・教員によるフィードバック

最後に担当教員4名全員による講評を行なって，コラージュワークショップを終了した。履修者全員が，コラージュ作品を制作するのは初めてだったが，時間内に作品を完成させ，展示し，発表を終えることができた。



写真3 コラージュ作品を鑑賞して付箋を貼る様子（撮影：大橋香奈）



写真4 発表会の様子（撮影：小山健太）

「異文化体験」を視覚化する

4.2 コラージュ作品の分析結果

コラージュ作品によって、「海外短期研修中のどのような出来事が表現されたのか」、「帰国後のどのような変化が表現されたのか」という二つの問いに答えるべく、収集したデータを「事例-コード・マトリックス」によって整理・分析した結果を、実際の参加者の作品や発言と関連づけながら、以下に示す。

・海外短期研修中のどのような出来事が表現されたのか

分析の結果、13個のコードが生成された。それぞれのコード名と該当した事例数を表3に示した。参加者19名のうち12名が現地での「人びとの態度」を、7名が「貧困問題」を作品の中で表現した。それ以外の11個のコードについては該当事例数にばらつきが見られ、多様な出来事が表現されたことがわかる。

表3 コラージュ作品で表現された海外短期研修中の出来事のコードと該当事例数

コード	事例数
人びとの態度	12
貧困問題	7
行事	4
日本とのつながり	3
食事、食品	3
Don't be shyという考え方	2
動物の扱い	2
自分の態度	2
ジェンダー観	2
交通事情	1
人びとの多様性	1
言語の壁	1
物価	1

最も多い12名の参加者が表現した現地での「人びとの態度」については、人びとの「温かさ」に注目したものが多かった。発表時の発言例を以下に引用する。

- ・一番印象に残っているのは、人の温かさや人との関わりだったので、人を中心に切り抜いた。食べ物屋さんで並んでいた時に、後ろの人が、日本人留学生だからという理由で話しかけてくれたり、先生とかも自分に興味を持って話しかけてくれた。それが印象的だった。(参加者I)
- ・フィリピンの人の温かさが印象的だったので、それを表現した。ドーナツ屋さんで写真

を撮ってくださいと言ったら店員さん全員が手を止めて写真を撮ってくれた。スモーキーマウンテンに向かう時、隣を走っていたトラックの運転手さんたちが手を振ってくれたりした。屋台の人は、自分たちが別の店で買った生の肉を焼いてくれた。(参加者L)

「人びとの態度」として、自分に向けられた視線を表現した参加者もいた。

- ・コラージュには、目をいっぱい貼った。現地の人いっぱい見られて、怖いと感じた。ストリートチルドレンもいっぱいいた。でも道とか質問した時は親切に答えてくれた。最初は怖いと感じたけど、周りの目がだんだんと温かいものを感じたので、いっぱい目を貼った。(参加者H)

「人びとの態度」と対照的に、現地での「自分の態度」を表現した参加者もいた。

- ・フィリピンに来てすぐはすごいビビっていた。1人で行動しないで団体で行動しようと思っていた。鶏はそういう自分を表している。(参加者J, 写真5)



写真5 参加者Jのコラージュ作品

「異文化体験」を視覚化する

参加者Jは、コラージュ上に大きな鶏のイメージを貼り付けたが、これは、「ビビっていた自分」と「鶏肉を食べることが多かった」という現地での食事の両方を表していると説明した。

「人びとの態度」に次いで多くの参加者が表現した「貧困問題」への着目は、現地でのアクティビティとして、「スモーキー・マウンテン」と呼ばれるゴミ山と周辺のスラム街を訪問したことが起点となっている。

- ・自分たちが行ったスモーキーマウンテンは行ける範囲のスラムで、後からたまたま見た動画ではもっと酷いスラムが出てきて、ここで生きられるのかなという場所で生活している人が結構いた。いっぱい人がいる裏には、僕たちが想像できないくらい、知ることも許されないぐらいの暗いものがいっぱいあるんだと思った。(参加者E, 写真6)

参加者Eは、作品で「貧困問題」と同時に、フィリピンで感じた「人びとの多様性」も表現している。

- ・人をいっぱい貼ろうと思って。その理由は、異文化というのは、僕は海外に行ったら食べ物を見たら文化がわかるとよく思うけど、食べ物の写真はあまり撮らなかったんで、新聞とかからいろんな人を集めて貼ってみた。Differentと書いたのは、フィリピンに行ってみて、あと事前学習も含めて思ったことは、日本人は見た目似てるし他のヨーロッパの人も似てる顔の人が多くて、フィリピンの人は日系の人も見たけどあまり似てなくて、食べ物より人の方がフィリピンの特徴がわかると思って、いろんな人のイメージを貼ってみた。いろんなタイプの人が集まっているという意味での多様性を表現した。(参加者E)

該当事例集は少ないが、日本から遠く離れた全く異なる国フィリピンで、日本との共通点や日本文化を発見した出来事、「日本とのつながり」を挙げた参加者がいた。

- ・東京の高速道路の景色にフィリピンの建物の景色を上からコラージュすることで、違う国でも似た景色があったり似たものがあることを表現した。(参加者M)
- ・フィリピンにいても特別なことばかりではなく、共通していたり、理解してもらえ日本があった。たとえばマリオとルイージは新聞から切り抜いたけど、フィリピンに行った時に、フィリピンの人とマリオとルイージの話で盛り上がったことがあった。日本の文化を知っている人がいて、つながりを感じた。離れていてもつながっていることを表した。(参加者B, 写真7)



写真6 参加者Eのコラージュ作品



写真7 参加者Bのコラージュ作品

・帰国後のどのような変化が表現されたのか

分析の結果、8個のコードが生成された。それぞれのコード名と該当した事例数を表4に示した。フィリピンに限らない「海外に対する興味関心の向上」が7例あったが、それ以外は件数の偏りはなかった。

「異文化体験」を視覚化する

表4 コラージュ作品で表現された帰国後の変化のコードと該当事例数

コード	事例数
海外に対する興味関心の向上	7
オンラインでのフィリピンの関係性の維持	3
日本文化の捉え直し	3
アルバイト先での外国人とのコミュニケーション機会の増加	2
英語学習への意欲の向上	2
コミュニケーションに対する考え方の変化	2
自分の「あたりまえ」の相対化	2
新しいことに取り組む意欲の向上	1

参加者Cは、「オンラインでのフィリピンの関係性の維持」、「アルバイト先での外国人とのコミュニケーション機会の増加」、「海外に対する興味関心の向上」の3点を一つの作品の中で表現している。

- ・日本だけで過ごしては体験できなかった人の温かさ、文化、地域、食べ物を経験できてよかったし、今後はフィリピン以外の国にも行ってみたいと思った。バイトの写真とスマホの写真は、日本に帰ってきてからもフィリピンの先生とつながるためにインスタでやりとりを続けていて、先生がストーリーに反応してくれた写真と、帰国してからはバイトで外国人のお客様と英語で話すことが多くなったので、経験を活かしているなと思って貼ってみた。(参加者C, 写真8)

参加者Rは、新聞や雑誌から、プーチン大統領や「Discover Japan」という文字を切り抜き貼り付けることで、自身の帰国後の変化として「日本文化の捉え直し」を表現した。

- ・フィリピンに行ってから「日本でどうい国なの」と聞かれてもあまり答えられなくて、こっちが聞くとフィリピンの政治や宗教のことを教えてくれて、自分は日本のこと関心がなかったかもと、そこで初めて気づいて、帰ってから政治とか宗教とか日本文化全般に関心を持つようになった。プーチンは時事問題の象徴として貼った。Discover Japanはフィリピンに行って日本のことを再発見したのでそれを貼った。神社の写真は、最近行ってみたりしたので。(参加者R, 写真9)

「異文化体験」を視覚化する

参加者 K は、フィリピンでの研修を経て「自分の『あたりまえ』の相対化」ができるようになったことを、宇宙服を着たダビデ像というコラージュ作品で表現した。

- ・ダビデ像が宇宙服を着ているように見えるという通常ではあり得ない描写では、自分たちにとってはあり得ないことが、他の場所では普通かもしれないということ。たとえば、フィリピンでは袋の中のドライマンゴーが飛び出て放置されていたり、フィリピンの街の汚い部分やあり得ないと感じる部分は、自分にとってはあたりまえでなくても、フィリピンやどこかでは普通のことかもしれないことを表現した。(参加者 K, 写真 10)



写真 10 参加者 K のコラージュ作品

4.3 考察

Butler-Kisber (2018) の研究をもとに、本研究ではコラージュを、海外短期研修の参加者が、異文化体験によって自身の「世界の見方」がどのように変わったかという「質問に対する回答を具体化するツール」、研修での「経験を振り返るツール」、そしてその内容についての教員と参加者および参加者同士の「コミュニケーションを喚起するツール」として用いた。ワークショップのプロセスや作品の分析結果を踏まえて、三つのツールとしてのコラージュの有効性について考察を述べる。

・「質問に対する回答を具体化するツール」としてのコラージュ

海外短期研修における「異文化体験」とその意味は、一人ひとりにとって多様である。しかし、文章でそれを表現しようとする時、焦点を絞らなければならない、まとめなければならないという発想になり、諸々のことがこぼれ落ちていく。たとえば、参加者の発言にあった「スモークマウンテンに向かう時、隣を走っていたトラックの運転手さんたちが手を振ってくれたりした」「フィリピンでは袋の中のドライマンゴーが飛び出て放置されていた」といった現地で目撃した一見些細とも思えるような出来事を、レポートなどの「まとめ」の文章でランダムに列挙することは憚られるだろう。その結果として、先行研究において指摘されているような「紋切り型の語り」が生まれることになる。しかし、コラージュの場合は、一つの空間の中に、多様な要素を並置できる。参加者は、一つの結論に向かわなければならないという「単一的」あるいは「直線的」発想から抜け出し、さまざまな断片を盛り込むことができる。

紙面の使い方も自由である。紙を縦で使用した参加者が10名、横で使用した参加者が9名いた。また、素材をランダムに貼り付ける、上半分と下半分で対比させる、左から右へ過去から現在を表現する、あえて紙面からはみ出すように貼る、といったレイアウトの仕方があった。数名の参加者から、「図工や美術が苦手のでできるか不安だったが、やってみたら楽しく取り組めた」という声があった。コラージュは、切って貼るという基本的な動作ができれば取り組むことができ、また廃棄予定の新聞や雑誌を素材にできるため、まさに「民主的でアクセスしやすいアート」であった。

・「経験を振り返るツール」としてのコラージュ

コラージュの素材となる、新聞や雑誌の中のイメージとの出会いは偶然である。参加者は各自で作品にしたい写真を持参したが、当日用意された素材を見ながら、偶然の出会いの中で記憶を呼び起こしたり、アイデアを発想したりした。この偶然性も、多様な表現と語りを生み出すことに貢献したと考えられる。「制作する過程で、自分の変化、気持ちが変わっていることに気づいた。フィリピンに対してのイメージが、ネガティブからポジティブに変化していったこと」(参加者F)、「作業中にみんなとフィリピンの話をできたのがよかった。素材を切っていくうちに、フィリピンらしさはわからなくなっていった」(参加者J)といった発言からも、制作中の偶然の出会いややりとりによって、自身の経験や感情を見出していることがわかる。

現地で新たな気づきを得た経験であっても、本人にとって新奇なことであれば、すぐには明確に言語化されない、言語化できないことがある。そうしたことは、レポートやプレゼンテーションでは表現しきれない可能性が高い。それに対して、コラージュの場合は、先行研究で示されていたように「意図したものと意図していないものの両方を明らかにする」特性

「異文化体験」を視覚化する

があり、海外短期研修のように学生にとって新奇性の高い学習が生まれる科目において、学生がまだ言語化できていなかった学習内容を、表現させることのできる可能性が大いにある手法と言えるだろう。

・「コミュニケーションを喚起するツール」としてのコラージュ

参加者にとって、コラージュ作品の制作は、海外短期研修での体験を振り返る3回目の課題であった。最初に取り組んだのは、帰国直後に担当教員宛に提出した文章である。具体的には「研修の振り返り（事前に立てた目標はどれくらい達成できたか、留学や海外体験全般を通じてどのような学びや発見があったのか、この経験を今後どのように活かしていきたいか）」について1500字以上で記述するものだった。現地での日記を転載するもの、写真とともに「学んだこと」を章立てて論じるものなど形式も内容も多彩なレポートが集まったが、方法としての困難もあり、履修者同士の共有は行わなかったため、この文章によって新たなコミュニケーションが発生することはなかった。

2回目の課題は、帰国から約2週間後、事後学習としてプログラムに組み込まれていた報告会でのプレゼンテーションである。「次年度の研修参加者へ伝えたい、エンデラン留学の魅力・教訓」というテーマで、5人1組のグループで制限時間6分の口頭発表を行なった。この場に今回の「異文化理解A」担当者である本稿著者の4名は居合わせ、履修者や報告会参加者とともに、フィードバックを行なった。プレゼンテーションの準備から発表までの協働や、報告に対するディスカッションで、個々の体験は他者とのコミュニケーションによって深められる反面、グループ内の統合されたストーリーに合致しない記憶の断片や情景は排除される傾向もある。

これら二つの課題における「振り返り」作業とコラージュワークショップを比較すると、コラージュの「コミュニケーションを喚起するツール」(Butler-Kisber 2018)としての有効性が浮かび上がる。ワークショップの最後の発表会では、全員の作品が展示されギャラリーと化した教室で、参加者は自分を含む19名分の「体験」を一覧し、限られた時間内でも、反応を記述する付箋や口頭による「共有、説明、質問、批評、主張、提案、交渉」により、コミュニケーションを通じた新たな発見を掴むことができたからである。

5. おわりに

本研究では、海外短期研修の参加者が異文化体験による変化を振り返って視覚化し、他の参加者と共有して学び合うことを目的とした、コラージュワークショップをデザインして実施した。Butler-Kisber (2018)の研究をもとに、コラージュを、海外短期研修の参加者が、異文化体験によって自身の「世界の見方」がどのように変わったかという「質問に対する回

答を具体化するツール」、研修での「経験を振り返るツール」、そしてその内容についての教員と参加者および参加者同士の「コミュニケーションを喚起するツール」として用いた。ワークショップのデザインにあたっては、「コンストラクショニズム」の学習理論をベースにした「協働による学習」の対話型フレームワーク (Laurillard 2012) を援用して検討し、デザインの詳細を「ペダゴジカル・パターン」(Laurillard 2012) として記述した。最後に、ワークショップのプロセスや作品の分析結果を踏まえて、三つのツールとしてのコラージュの有効性について考察を述べた。

本研究では、同一の海外短期研修プログラムに参加した学生を対象にコラージュワークショップをデザインして実施したが、今後は異なるプログラムに参加した学生を対象に実施する場合についても検討し、比較研究を行いたい。

謝辞

本研究へのデータ提供に協力してくれた2023年度1期「異文化理解A」履修者19名に感謝する。コラージュの素材として、本学図書館の廃棄予定の雑誌や新聞を利用した。準備いただいた図書館職員の方々に御礼申し上げる。また実施したコラージュワークショップは、大橋がファシリテーターを務めた2019年10月20日開催「第3回多文化ユースのためのアートワークショップ“My routes and our routes (私のルーツと私たちのルーツ)”」(主催：明治学院大学心理学部附属研究所特別研究プロジェクト「心理学部におけるグローバル化および内なる国際化に関する探索的研究」／共催：多文化ユースネットワーク)での企画内容を発展させたものであり、関係者に感謝する。

注

- 1) 新型コロナウイルス感染症の影響により2020年からは激減しているが、文部科学省は5年後の2027年までにコロナ禍前の10万人規模の水準に回復させる目標を発表した(文部科学省2022)。
- 2) 東京経済大学公式ウェブサイト内のシラバス参照ページ (<https://portal.tku.ac.jp/syllabus/public/>) に掲載の2023年度「異文化理解A」シラバスの内容より一部を要約した。
- 3) 第1部の映画鑑賞および議論は、第2部の前座として企画した。自身の体験をビジュアルイメージで表現するコラージュ制作を前に、研修先であるフィリピンを舞台とした映画の視聴は、履修者たちの五感による具体的な体験を「呼び覚ます」作業に寄与すると考えたからである。視聴した作品は、2015年にイタリアで制作され、2017年に日本でも劇場公開された長谷川宏紀監督『ブランカとギター弾き(原題:Blanka)』(トランスフォーマー, 2018年)である。77分という尺が授業時間に適していることに加え、日本出身の監督が実際のストリートチルドレンをスカウトしてキャスティングしたという映像のリアリティが、今回のワークショップに相応しいと判断した。フィリピンの路上で暮らす孤児の少女ブランカが盲目のギター弾きと出会い、歌や旅を通して「スラム外」の世界を知る物語について、少なからぬ履修者は「実際

「異文化体験」を視覚化する

に見たストリートチルドレンのことを思い出した」と証言した。鑑賞後、履修者はコメントシートに「映画の感想」を記述し、「自身の体験を色とともに表現」した。その後はシートをもとにグループで議論し、内容を全体で共有、教員によるフィードバックを行なった。これら一連の作業は、コラージュ制作の「準備体操」として機能した感触を著者一同は持っているが、両者の対応関係についての検証は今後の課題である。

- 4) 本稿著者のうち松永、光岡の2名は当該研修の担当教員も兼任しており、履修者の募集と選抜(2022年7月)から事前学習、派遣と引率、事後学習と成績評価(2023年3月)まで継続的にかかわってきた。引率で得た所見については、本学部の広報用ブログでレポートしている。TOKECOM note「帰国報告：フィリピン短期留学[人生で一番鮮やかな、色のある3週間]」(2023年2月28日公開) <https://note.com/tokecom/n/nc2fc507d83cb>

引用・参考文献

- Butler-Kisber, L., Allnutt, S., Furlini, L., Kronish, N., Markus, P., & Stewart, M. (2005) Collage as inquiry: Sensing, doing, and knowing in qualitative research. Paper presented at the annual meeting of the American Educational Research Association, Montreal, CA.
- Butler-Kisber, L. (2010) *Qualitative inquiry: Thematic, narrative and arts-informed perspectives*, Sage.
- Butler-Kisber, L. (2018) *Qualitative inquiry: Thematic, narrative and arts-based perspectives*, SAGE.
- Chant, A. (2020) Use of narratives and collage in the exploration of the self and the meaning of a career, *British Journal of Guidance & Counselling*, 48: 1, pp. 66-77.
- 平野由貴, 紅林秀治 (2014) 「コンストラクショニズムに基づく学習の過程の検討」『静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』No22, pp. 29-37.
- Laurillard, D. (2012) *Teaching as a Design Science: Building Pedagogical Patterns for Learning and Technology*, London: Routledge.
- Leavy, P. (2015) *Method meets art: Arts-based research practice (2nd ed.)*, Guilford Press.
- 箕曲在弘, 井沢泰樹, 高橋典史, 本田宏治, 三石庸子 (2017) 『社会文化体験演習活動報告書 第2分冊 (キャリア分野). コーヒーを通して世界とつながる. フェアトレードに関する体験学習の現場から』東洋大学社会学部社会文化システム学科.
- 文部科学省 (2022) 末松信介文部科学大臣記者会見録 (令和4年7月26日) https://www.mext.go.jp/b_menu/daijin/detail/mext_00287.html (2023年10月20日アクセス)
- Mullen, C. A. (1999) Carousel: A Metaphor for Spinning Inquiry in Prison and Education, *Counterpoints*, 89, pp. 281-314.
- Norris, G., Mbokazi, T., Rorke, F., Goba, S., & Mitchell, C. (2007) Where do we start? Using collage to explore very young adolescents' knowledge about HIV and AIDS in four senior primary classrooms in KwaZulu-Natal, *International Journal of Inclusive Education*, 11: 4, pp. 481-499.
- Prasad, G.L. (2020) 'How does it look and feel to be plurilingual?': analysing children's representations of plurilingualism through collage, *International Journal of Bilingual Education*

- and Bilingualism*, 23, pp. 902-924.
- Rainey, L.S. (1998) Taking Dictation: Collage Poetics, Pathology, and Politics, *Modernism/modernity*, 5 (2), pp. 123-153.
- 佐々木有紀, 新田よしみ, 工藤 俊郎 (2020) 「短期海外研修・事前研修の異文化対応力変化の可視化 (福岡大学の事例)」『グローバル人材育成教育研究』8巻, 1号, pp. 36-45.
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2011) 平成 21 年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果 https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2009n.pdf (2023 年 10 月 20 日アクセス)
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2021) 2019 (令和元) 年度日本人学生留学状況調査結果 https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/03/date2019n.pdf (2023 年 10 月 20 日アクセス)
- Williams, B. (2000) Collage work as a medium for guided reflection in the clinical supervision relationship, *Nurse education today*, 20 (4), pp. 273-278.
- Yuen, F. (2016) Collage, *Journal of Leisure Research*, 48: 4, pp. 338-346.